

# キャリア継続女性の結婚・出産をめぐる課題に関する研究

—都市部 30～40 代〈高年収高学歴〉女性を対象に—

伊 藤 寛 子

## 1. はじめに

本稿は、30～40 代において就業を継続している大卒女性の結婚・出産をめぐる実態を明らかにしていくことを目的としたものである。

出産・育児期にあたる 30 代の労働力率が低下する M 字型雇用が、日本に特徴的な女性の就業状況の課題として指摘されて久しい。一方、M 字型カーブの底にあたる年齢層においてもなお結婚や出産をせずに働き続けるいわゆる「キャリア女性」の実態や意識についてはあまり語られておらず、高学歴高年収の女性に限った研究は今までされてこなかった。女性のキャリア継続と結婚・出産・子育ての両立は困難であると理解されてはいても、キャリア女性が結婚・出産をせず働き続ける原因や、結婚・出産との両立を阻む障害については不明瞭で、M 字型雇用が抱える課題解決の方途が見つけられないままである。

近年、男女雇用機会均等、共同参画、さらに女性活躍推進の一方で、「女女格差」が注目されており、30～40 代の高学歴女性に関する先行研究では、その課題として 3 点が指摘されている。

第 1 は、女性の高学歴化が就業継続の可能性には結びつかないことである。橋本は M 字型雇について、大卒・大学院卒の高学歴女性が 20 代では短大卒や高卒の女性よりもかなり高い比率で働いているにも関わらず、M 字型カーブの底を迎える 30 代後半以降の再就業はそれほど高い割合を示さず、その結果、40 歳を超えてからの有業率は短大卒や高卒女性の方が高くなることを指摘した<sup>(1)</sup>。

第 2 は、男女の雇用機会均等化、女性の活躍推進が、女性に与える負荷が指摘されている。上野は、国が「男女共同参画」を推進した理由について、少子高齢化社会の中で「女にも働いてもらいたい」「女に子どもも産んでもらいたい」という二重の期待が寄せられたものであると論じている<sup>(2)</sup>。また、中野は、1978 年生まれ以降の「育休世代」の女性が、「男なみ」に仕事で自己実現することをたたきつけられる「自己実現プレッシャー」と、早めに母になり、母としての役割を果たすことを求められる「産め働け育てろプレッシャー」の 2 つを背負っていると、大卒女性の葛藤を表した<sup>(3)</sup>。

第 3 は、M 字カーブの凹みが深くなる 30 代に向けて、女性たち、とりわけ「高学歴女性」の課題として指摘されてきた「ガラスシーリング（ガラスの天井）」<sup>(4)</sup>がある。企業内で今後の管理職候補者が選出される 20 代後半は、女性たちが結婚について検討する時期と重なり、高学歴女性にとっては、仕事と結婚・出産をめぐる葛藤に直面せざるをえない時期とも言える。

以上は実態をふまえた論考ではあるが、仮説的な側面もあり、具体的状況をふまえた検討は不十分である。そこで、本稿では30～40代のキャリア継続女性について、調査を用いてその実態の検討を行いたい。一般的には30～40代は女性のM字型カーブの底辺にあたり、結婚・出産・育児のために離職・休職する人が多いとされている年齢階層である。にもかかわらず、キャリア継続する女性たちの結婚や出産をめぐる実態を明らかにすることで、働き続ける理由、その意識が特徴的に表れると考えた。

本稿では、キャリアを継続する女性の実態について次の5点を中心に検討を進める。

第1に、未婚・晩婚、また少産・未産の程度について。全国の同世代の一般女性と比較した場合どのような傾向があるのかを分析する。

第2に、キャリア継続が結婚や出産のイベントにどのような影響を与えているのか。そこから見えてくる課題について探る。

第3に、既婚女性が、就業と結婚・出産をどのように両立させてきたのか。結婚や出産のタイミングについて確認する。

第4に、配偶者（パートナー）への期待について。結婚の選択と結婚生活を継続する上でパートナーに何を期待するのか、その特色を明らかにする。

第5に、出産・子育て観について。子どもを持つことへの考え、希望の特徴を探る。

調査対象とした〈高年収高学歴〉女性とは、正規雇用の職に就き、年収が600万円以上<sup>(5)</sup>で、かつ大学・大学院卒の学歴を持つ女性を指す。対象をこのように限定したのは、男並みに働きながら女としての出産・育児の役割も期待されている、いわゆる「キャリア女性」の結婚・出産をめぐる傾向や特徴に焦点を絞るためである。高年収・高学歴の定義については議論が分かれるところであるが、本稿ではこの条件を充たす対象を「キャリア女性」と捉え検討を進めたい。

## 2. 都市部30～40代〈高年収高学歴〉女性の結婚・出産に関する調査

就業継続女性の結婚や出産における現状について定量的に把握し、その傾向や特徴を探ることを目的に「都市部キャリア女性調査」（2014）を実施した。

### 1) 対象の設定と用語の定義

今回の調査は、30～45歳の正規就業中の都市部在住女性のうち、年収600万円以上、かつ大学・大学院卒の者（以下、「都市部キャリア女性」と表記）に対象を絞った<sup>(6)</sup>。

### 2) 調査概要

- ・調査対象者：277名（回答者342名中、中卒・高卒・短大卒を除外した）
- ・調査期間：2014年7月1日～2014年7月28日（サンプリング期間含む）
- ・調査方法：インターネット調査

- ・調査内容：未婚女性……結婚意欲・未婚理由・結婚相手に求める条件・出産育児の不安など  
既婚女性……結婚理由・子どもの数・未産理由・結婚相手に求めた条件など

これらの各項目について、既存の全国調査の結果と比較した。今回の調査と既存のデータでは、対象者の数や年齢の相違や質問内容などにおいて必ずしも同質ではないものの、全国女性の平均値と比較することで「キャリア女性」の大きな傾向や特徴がつかめると考えた。

### 3. 調査結果と考察

調査の結果とその考察について、「はじめに」に挙げた5点に着目しながらまとめる。

#### 1) 未婚率

都市部キャリア女性の未婚率は30～34歳で45.8%、35～39歳で50.0%、40～44歳で46.2%と、どの年齢階級でも約半数が未婚であった。2010年時点の全国調査と比較すると、全国一般女性の未婚率よりも、30～34歳の年齢層で8.4%、35～39歳で25.0%、40～44歳で23.8%高く、30代後半以降の対象者の未婚傾向が強いことがわかる（図1）。

#### 2) 平均初婚年齢

都市部キャリア女性全体の平均初婚年齢は、31.0歳と晩婚の傾向が見られた。2014年の女性平均初婚年齢は全国で29.4歳、東京都の女性に限ると30.5歳である<sup>(7)</sup>。人口動態統計調査の平均初婚年齢の算出方法は、同年に同居し届け出たものについての集計であることから、今回の調査と単純な比較はできないものの、都市部キャリア女性の初婚年齢は全国平均よりも1.6歳、東京都平均よりも0.5歳高い。

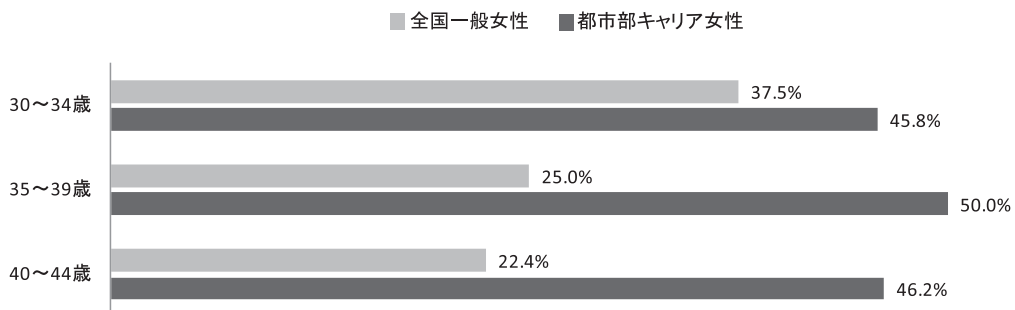


図1 未婚率 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

（国立社会保障・人口問題研究所『第14回 出生動向調査』（2010）「年齢階級別未婚率・有配偶率」と、「都市部キャリア女性調査」（2014）の結果を合わせて筆者作成）

参照サイト：[http://www.sendai-l.jp/chousa/pdf\\_file/4/4-1/4\\_1\\_2.pdf](http://www.sendai-l.jp/chousa/pdf_file/4/4-1/4_1_2.pdf) 2016.7.21 閲覧

### 3) 既婚者の子どもの数

都市部キャリアの既婚女性のうち、子どもを持たない割合が60.7%と半数以上を占めた。全国の既婚女性のうち、子どもがいない割合は30代で14.9%、40代では9.2%であることと比較すると今回の対象者の未産傾向は非常に強いことがわかる。また、子どもが2人以上いる割合が全国では30代で60.1%、40代では76.2%であるのに対し、都市部キャリア女性はわずか11.0%に留まり、少産の傾向も強かった（図2）。

### 4) 出産年齢

都市部キャリア女性の出産年齢は全体的に遅く、晩産の傾向が全国平均よりも強かった。第1子平均出産年齢は、全体で32.8歳 第2子平均出産年齢は、34.3歳であった。2012年時点での全国女性の第1子平均出産年齢が30.3歳、第2子が32.1歳である<sup>(8)</sup>。これと比較すると、全国平均女性出産年齢よりも第1子で2.5歳、第2子で2.2歳高かった。

1)～4)の結果より、昨今、女性の未婚・晩婚・未産・晩産・少産傾向が問題視される中、都市部キャリア女性は、全国一般女性と比較してこれらの現象がさらに強いことが明らかとなった。

### 5) 未婚者の結婚意欲

都市部キャリアの未婚女性の結婚意欲は、決して低くなかった。対象者のうち、「結婚したくない/結婚するつもりはない」と回答した割合は、30～34歳で4.3%、35～39歳で17.5%、40～44歳で21.2%存在した。全国の未婚女性のうち、「一生結婚するつもりはない」と答えた女性は、30～34歳で全体の9.3%、35～39歳で17.8%、40～44歳で31.5%という結果と比較すると、今回の対象の方がどの年齢階級においてもそれぞれ低く、言い換えれば結婚意欲は高かった。

このことから、都市部キャリア女性が結婚に対して後ろ向きであったり、無関心であったりする傾

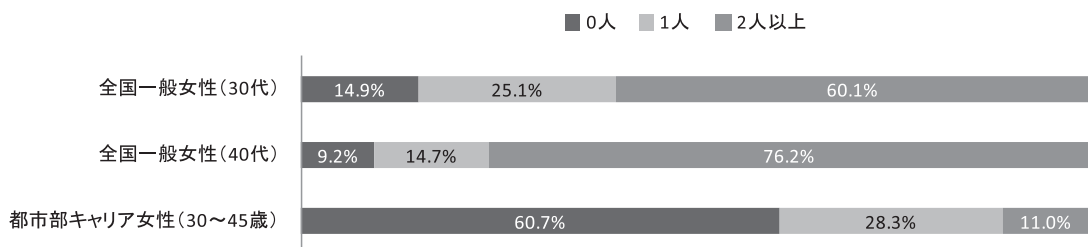


図2 既婚者の子どもの数 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

（総務省『平成22年社会保障を支える世代に関する意識等調査』（2010）の「第3表（ア）既婚者の構成割合、性、年齢階級・子どもの数別」と、「都市部キャリア女性調査」（2014）の結果を合わせて筆者作成）

注1：全国データの回答対象は、30～39歳、40～49歳の既婚女性のデータを抜粋。子どもの数が「不詳」を除く

参照サイト：<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001096685> 2016.9.13 閲覧

注2：都市部キャリアデータの回答対象は、既婚、再婚、離婚している女性

向は見られない。それどころか、全国女性は30代後半と40代前半との間で結婚意欲に13.7%の開きがあるのに対し、都市部キャリア女性の30代後半と40代前半ではわずか3.6%の違いである。このことから、都市部キャリア女性は40歳を過ぎても結婚意欲は低下せず、未婚率の高さは結婚意欲が低いためではないことが読み取れる（図3）。

## 6) 未婚理由

都市部キャリア未婚者の結婚しない理由については、全国データと比較して「独身の自由さを失いたくないから」「結婚する必要性をまだ感じないから」が高かった。一方で、「結婚資金が足りないから」の回答は0%である。都市部キャリア女性が未婚である理由は、金銭面ではなく、精神面での準備がまだ整っていないためであると言えよう（図4）。

## 7) 既婚者の出産意欲

都市部キャリア女性の出産意欲は、全国と比較して高いことがわかった。この先子どもを生むつもりのない者の割合を、年齢階級別に全国データとで比較すると、どの年齢階級でも都市部キャリア女性性が低く、全国との差は年齢階級が高まるにつれて開いた。都市部キャリア女性の出産意欲は加齢とともに低下する傾向が弱く、30代後半以降で子どもを産み育てる予定の者が多く存在することがわかる（図5）。

## 8) 既婚者の未産理由

既婚未産の対象者に子どもを産んでいない理由を尋ねたところ、最大の理由は「ほしいけれどもできない」（62.9%）であった。このほかの理由としては、「自分の仕事に差し支える」「自分や夫婦の

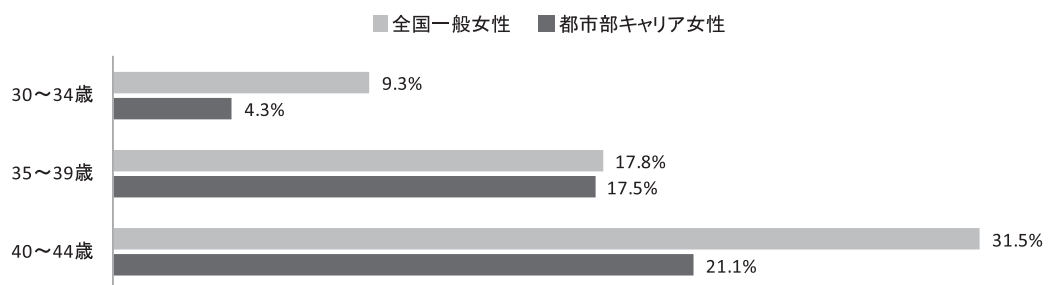


図3 一生結婚する気はないと考える未婚者の割合 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

（国立社会保障・人口問題研究所『第14回 出生動向調査』（2010）の、「結婚の意欲」と、「都市部キャリア女性調査」（2014）の結果を合わせて筆者作成）

注：都市部キャリアのデータは、対象年齢の未婚女性のうち、結婚予定について「結婚したくない／結婚するつもりはない」と回答した者の割合

参照サイト：[http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/chapter1.html#11a](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/chapter1.html#11a) 2016.9.22 閲覧

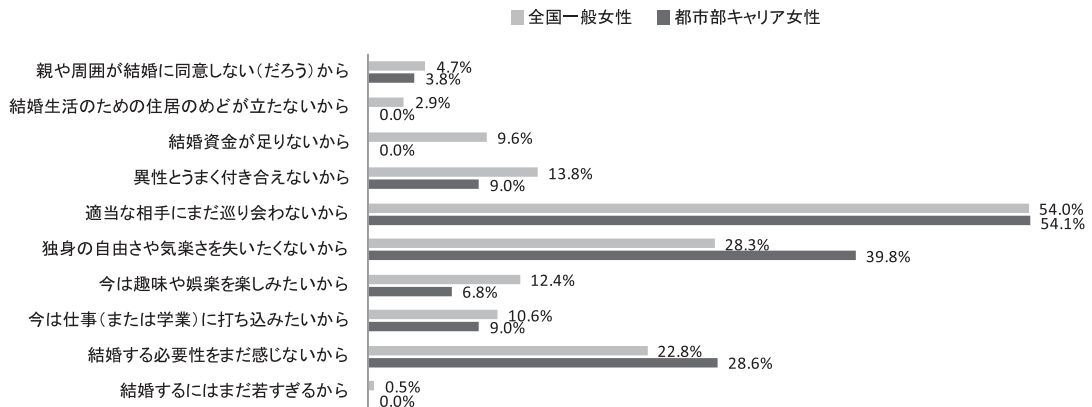


図4 未婚理由 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

(国立社会保障・人口問題研究所『第14回出生動向基本調査』(2010)の「表5-4 男女年齢(5歳階級)別、独身でいる理由(最大～第三)別、未婚者数」と、「都市部キャリア女性調査」(2014)の結果を合わせて筆者作成)

注1: 全国データの対象は未婚女性30～44歳

注2: 両調査ともに3つまでの複数回答

参照サイト (2016.9.22 閲覧): [http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?\\_toGL08020103\\_&tclassID=000001040981&cycleCode=0&requestSender=search](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001040981&cycleCode=0&requestSender=search)

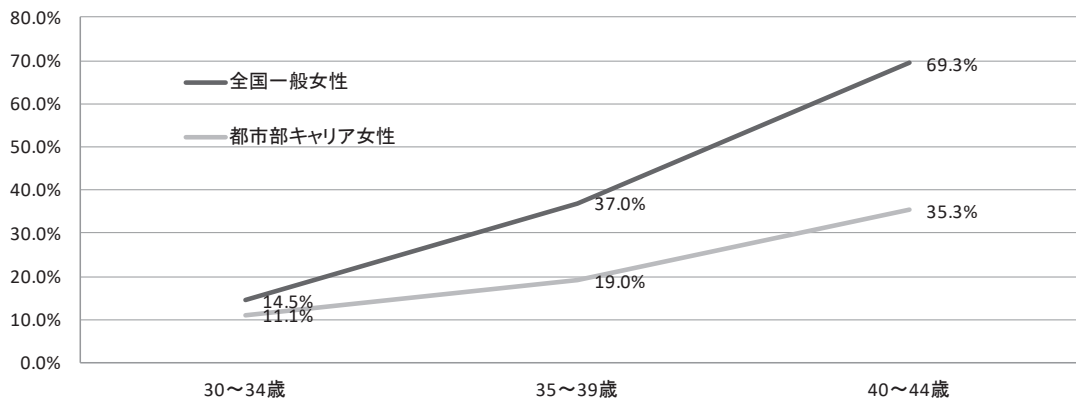


図5 既婚者のうち、今後子どもを生むつもりのない者の割合 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

(国立社会保障・人口問題研究所『第14回出生動向調査』(2010)の「表4-2 妻の現在年齢別、理想子ども数別、夫婦数および平均理想子ども数」と、「都市部キャリア女性調査」(2014)の結果を合わせて筆者作成)

注1: 全国のデータは、年齢階級別に理想の子ども数が0人の割合を算出。対象は全国の50歳未満、初婚同士の夫婦の妻6705人(不詳を除く)のうち、30～44歳のみを抽出

注2: 都市部キャリアデータは、30～34歳の既婚かつ未産の対象者のうち、「子どもはほしいですか」の質問に対して「いいえ」と回答した割合

参照サイト (2016.9.20 閲覧): [http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?\\_toGL08020103\\_&tclassID=000001040174&cycleCode=0&requestSender=search](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001040174&cycleCode=0&requestSender=search)

時間を大切にしたい」（共に 17.1%）が続いた。

一方で、全国調査で最も多い理由の「子育てや教育にお金がかかりすぎる」（60.4%）を未産理由に挙げる都市部キャリア女性は 2.9%であった。また、全国で二番目に多い理由の「高年齢で生むのはいやだ」（35.1%）を選んだ都市部キャリア女性は存在しなかった。都市部キャリア女性にとっては、出産や育児にかかる金銭的負担が未産に繋がっているとは考えがたく、高齢出産を懸念する割合も低いと言える（図6）。

## 9) 未婚者の将来の出産・育児に対する不安

未婚の対象者に「この先、結婚して子どもを生み育てるにあたっての心配ごと」について質問したところ、高齢出産への不安の声が多く挙った。具体的には、年齢的にまだ産めるのか、高齢で出産して健康な子どもが生まれてくるのか、たとえ出産しても年齢的に育てる体力がないのではないか、という内容の回答が多かった。未婚のキャリア継続女性たちは、仕事で男性並みの業務をこなして忙しい日々を送りながらも、一方では「出産」という女性のタイムリミットについても意識して、不安を抱えている様子が伺える。ここで注目すべきは、8) で述べた既婚者の未産理由で「高年齢で生むのはいやだから」と回答した都市部キャリア女性が 0%であった点である（図6）。都市部キャリア女性にとって、加齢が出産意欲の低下には繋がっていないものの、加齢による出産や育児への不安は強く感じているという結果が出た。

その他、教育の質（低レベル化）や、未来の子どもたちを取り巻く不安定な社会環境について懸念する意見や、仕事との両立を心配する意見も多く、彼女たちが自分の子どもを生み育てることに対し

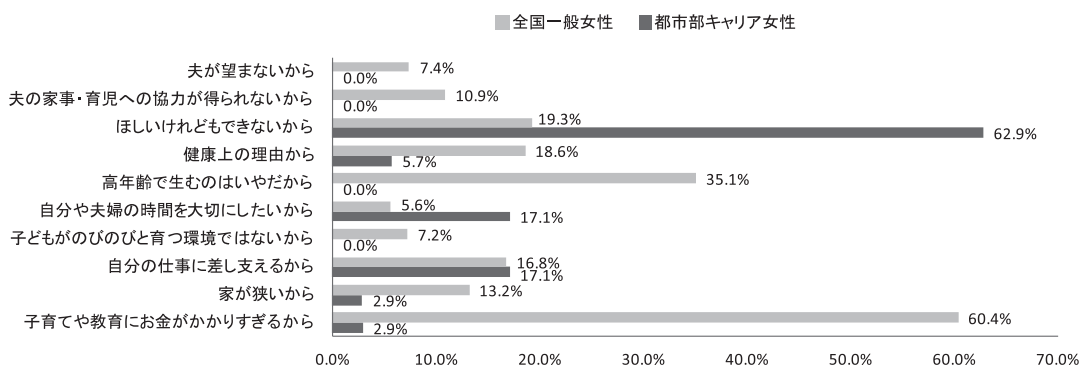


図6 既婚者の未産理由 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

（国立社会保障・人口問題研究所『第14回出生動向基本調査』（2010）の「理想の子ども数を持たない理由」と、「都市部キャリア女性調査」（2014）の結果を合わせて筆者作成）

注1：全国データの対象は予定子ども数が理想子ども数を下回る初婚同士の夫婦

参照サイト：<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/chapter3.html> 2016.9.7 筆者閲覧

注2：都市部キャリアデータの対象は、既婚者と再婚者のうち、子どもを持たない女性

注3：両調査ともに3つまでの複数回答



て非常に慎重な面が見受けられた。

5) ～ 9) より、都市部キャリア女性の未婚現象の裏には、結婚意欲は高く、いつかは結婚する予定だが、未だ理想の相手が見つからなかったり、結婚する必要性を感じなかったりすることから、結婚を先送りして晩婚につながる傾向が見えた。また、未産現象の裏には、出産意欲は高いがなかなか妊娠・出産には至れない「不妊」の問題が大きく起因していることが垣間見られた。出産のタイムリミットや高齢出産に不安を感じて焦りながらも、仕事へ差し支えることを心配する様子が伺えることから、男並みに働くことと、女性として子どもを生み育てることへの二重のプレッシャーが彼女たちにかかっていることが読み取れる。

## 10) 最終的に結婚を決めた理由

都市部キャリア女性が、最終的に結婚を決断した最大の理由は「年齢的に適当な時期だと感じた」であり、二番目の理由は「できるだけ一緒に暮らしたかった」であった。これは全国一般女性の調査結果と同じ傾向であった。30代前半の都市部キャリア女性の理由の三番目に「自分または相手の仕事の事情」(23.3%)が挙っており、これは全国一般の30代前半女性と比較して11.7%高かった。このことから、都市部キャリア女性は結婚というライフイベントの決定を、自分やパートナーの異動や

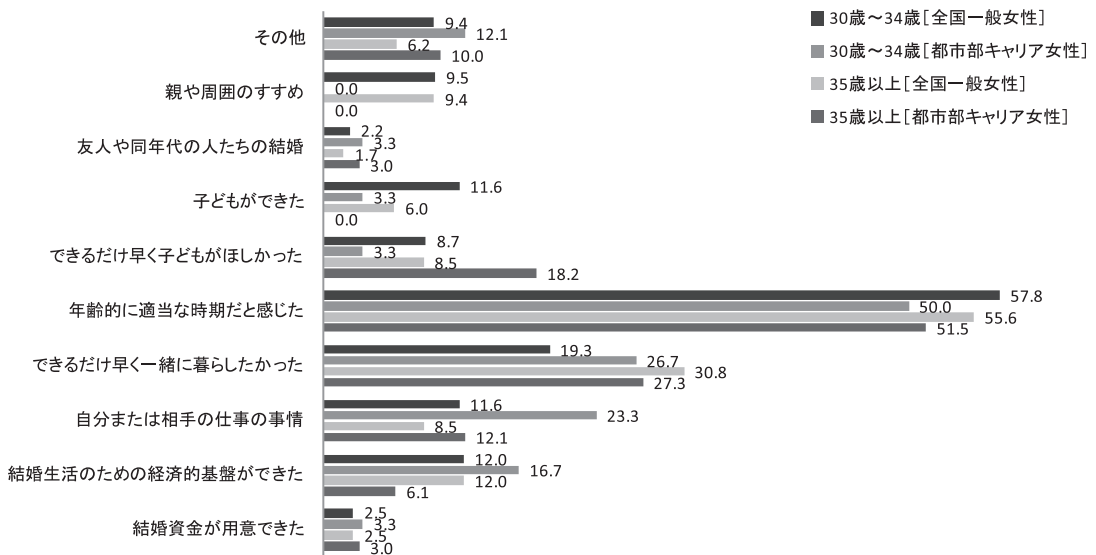


図7 最終的に結婚を決めた理由 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

(国立社会保障・人口問題研究所『第14回 出生動向基本調査』(2010)と、「都市部キャリア女性調査」の結果を合わせて筆者作成)

参照サイト：<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/chapter1.html#12> 2016.9.22 閲覧

注1：全国データの回答対象は、過去5年間に結婚した初婚同士の夫婦

注2：都市部キャリアデータの回答対象は、既婚者と再婚者

注3：両調査とも複数回答



転勤・転職などのキャリアイベントのタイミングに合わせる傾向が強そうである（図7）。

また、先に触れた、8) の都市部キャリア既婚女性の未産理由で「自分の仕事に差し支えるから」（17.1%）が二番目に多いことから、子どもを生み育てるというライフプランもキャリアコースを意識したうえで設計される傾向がうかがえる。

## 11) 結婚相手の条件

都市部キャリア女性がパートナーに求める条件としては、「人柄」のほか「経済力」・「職業」・「容姿」・「学歴」など、かつての「3高」に関わる条件への希望が強かった。中でも「学歴」を重視・考慮する割合が全国に比べてそれぞれ10%以上も高かった。これは、対象者自身の学歴も高く、結婚相手にも自分と同等レベル以上の学歴を求める傾向があることを示唆する。また、都市部キャリアの未婚女性が二番目に重視する条件は「経済力」である。これは都市部キャリア既婚女性との間に13.1%の差が生じており、独身時の生活レベルを下げてまで結婚するつもりはないという意識がうかがえる。また、都市部キャリアの既婚女性が二番目に重視する条件は「仕事への理解」である。正規社員として残業等で忙しく働くキャリア女性にとって、自分の仕事への理解を得られることが結婚を決める重要な要素なのである。都市部キャリア女性は、結婚後も経済的豊かさや仕事上の社会的ステータスを保ちたい、もしくはさらに高めたいと考えているようである。

一方で、「家事・育児能力」を重視する割合は、全国女性が61.1%であるのに対して、都市部キャリアの既婚女性は29.5%、未婚者は25.5%とどちらも低かった。この結果については、今回の対象者が、(1) 万能なので相手の協力を必要としない、(2) 両親の協力を得られる、(3) 経済力があるゆえに外注する、などの理由が考えられる。都市部キャリア女性は「共通の趣味」もそれほど重視・考慮

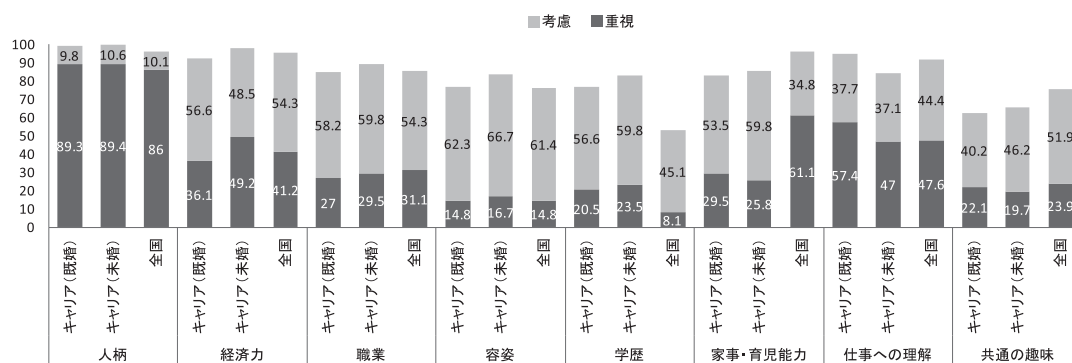


図8 結婚相手の条件として重視・考慮する割合 —全国一般女性と都市部キャリア女性の比較—

（国立社会保障・人口問題研究所『第14回 出生動向基本調査』（2010）の「結婚相手に求める条件」と、「都市部キャリア女性調査」の結果を合わせて筆者作成）

注1：全国データの回答対象は、「いずれ結婚するつもり」と回答した18～34歳の未婚女性

参照サイト：[http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/chapter3.html#33](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/chapter3.html#33) 2016.9.22 閲覧

注2：都市部キャリアデータの回答対象は、全員

していないことから、結婚後に相手と一丸となることよりも、個々の生活を大切にしながら自立し尊重し合う関係性を期待していることが示唆される（図8）。

彼女たちの出産や子育て観に関わる調査項目としては、10) 最終的に結婚を決めた理由において、「できるだけ早く子どもがほしかった」と回答する35歳以上の割合が、全国女性に比べて9.7%高い。一方で、都市部キャリア女性のうち「子どもができた」ために結婚した、いわゆる「授かり婚（デキ婚）」の割合が30～34歳で3.3%、35歳以上の回答者は存在しなかった（図7）。このことから、都市部キャリア女性は出産・育児を目的に戦略的に結婚する傾向強く、授かり婚が極めて少ないことから、妊娠や出産において非常に計画的であると言える。

#### 4. 結論

本稿では、都市部在住の30～40代〈高年収高学歴〉女性の結婚・出産に関する調査（本稿では「都市部キャリア女性調査」と表記した）とその結果について論じてきた。

東京都は多くの企業が集中し、また入学試験のレベルの高い大学が数多く存在することから、女性就業者のうちの一般企業で働く「キャリア女性」と定義されるような〈高年収高学歴〉の比率が高く、検証に適した地区であったと言える。今回の調査結果から見えた都市部キャリア女性の結婚・出産にまつわる傾向や考え方の特徴は、以下のようにまとめられる。

第1に、キャリア継続女性の未婚・晩婚、また少産・未産の程度について。都市部キャリア女性の未婚率、平均初婚年齢がともに全国平均と比較して高く、未婚、晩婚の傾向が強いことがわかった。また、本調査対象のうち、出産経験のある者の割合は、全国的女性平均と比較して低かった。また、第2子まで出産している割合も全国と比べて極めて少なかった。加えて、第1子・第2子出産年齢も全国平均と比べて高かったことから、都市部キャリア女性の未産・少産・晩産の傾向が明らかになった。これらの結果から、都市部キャリア女性は、現代の未婚・晩婚・晩産・少子化の現象を押し上げている存在であると言える。

第2に、女性のキャリア継続が結婚や出産に与える影響と、そこから見える課題についてである。今回の調査結果からは、都市部キャリア女性の結婚や出産に対する意欲は高いことが明らかとなった。結婚を先送りする要因としては、「独身の自由さを失いたくないから」、「結婚する必要性をまだ感じないから」と精神的・経済的に満たされているがゆえに、結婚を急いでいないことが挙げられる。また、既婚者の未産理由としては、「ほしいけれどもできない」と回答する者が多く、不妊の問題が顕在化した。出産年齢のタイムリミットを意識した焦りや、高齢出産への不安を抱きながらも、出産・育児によるキャリアへの影響を懸念する傾向が強く、エリート社員として男並みに働く「男的役割」と子どもを産み育てる「女的役割」との二重期待をかけられ、葛藤している事実がある。

第3に、既婚のキャリア継続女性が、就業と結婚・出産をどのように両立させてきたのか。結婚や出産のタイミングで、今回の対象者に象徴的なのは、ライフコースとキャリアコースが密接な関係を持ち、しばしば後者のキャリアコースがライフコースに強い影響を与え、拘束している点である。「自

分または相手の仕事の事情」で最終的に結婚を決めた対象者の割合が全国平均より高かったり、「自分の仕事に差し支えるから」という理由で子どもを持たない対象者の割合が高かったりすることから、彼女およびパートナーの異動や転勤・転職等が結婚というライフイベントに影響を与えたり、妊娠や出産の時期もキャリアによるタイミングによって計画されたりしていることが伺える。

第4に、配偶者（パートナー）へ期待するものとその特徴として、「家事・育児能力」の期待値が低いことが挙げられる。既婚女性に限って見ると、自分自身の「仕事への理解」は求めるものの、パートナーとの「共通の趣味」はそれほど求めていないなど、全体的にパートナーとの関係性において、「助け合い」よりも「高め合い」を理想とし、「二人三脚」ではなくそれぞれが自立して生活する「二人四脚」のようなスタイルを希望している。未婚女性のほとんどが相手の「経済力」を求めていることから、独身時点の生活レベルや社会的ステータスを維持もしくはより高める存在を期待している。

第5に、出産・育児の希望については、慎重で計画的な姿がみられる。例えば、結婚を決めた理由では、「子どもが早くほしいから」という妊活目的の割合が高く、反対に「子どもができたから」という理由で無計画に「授かり婚（デキ婚）」をする率は低い。また、将来の出産・育児の不安要素として、教育の質（低レベル化）や、未来の子どもたちを取り巻く不安定な社会環境について懸念する意見や、仕事との両立を心配する意見も多く、子どもを生み育てることに對して非常に慎重な面が見受けられた。

今回の調査からは、30～40代の都市部キャリア女性たちがしばしばキャリアコースを優先するために、結婚・出産を先のばしている事実がわかった。未婚や晩婚の傾向が強い原因は、結婚「できない」のではなく、「（今は）しない」という意識が強いためである。一方で、キャリアコースを大切にしながら、出産というライフイベントを計画的に考え、両立を願っている彼女たちの多くが、不妊の問題に直面しており、出産「しない」のではなく、「できない」ために理想通りに働きながら産み育てられていない実態が明らかとなった。この特徴は、昨今論じられている「女性の貧困」問題や「女性の社会進出」課題とは対照的である。仕事と出産育児との両立を願って「計画的」に結婚し、出産に向けて努力するキャリア女性たちが、結果的に両立が叶わずに退職を決断したり、子どもを持つことを諦めたりしている現実には、育児支援金・不妊治療助成金等の経済的補助や、育児休業期間延長・待機児童解消等の受け皿の制度充実等では解決できない大きな課題であり、別途議論されるべきであると考えられる。学生時代から男性と同様に学び、大学卒業後は社会の期待に応じて男性と同じように働き、活躍する彼女たちが、30歳を過ぎた辺りから出産という課題に直面し、不妊に悩み、仕事と育児との両立の難しさに初めて気づき、「真面目にがんばってきたのに、こんなはずではなかった」、「学校ではだれも教えてくれなかった」と葛藤している現状がある。女性たちが能力をいかして社会で自己実現していくために、本当に必要なキャリア教育とはどのようなものなのか。今、高校や大学でのキャリア支援・キャリア教育の見直しが急がれる。

- 注(1) 橘木俊詔『女女格差』（2008）東洋経済新報社 pp212-214
- (2) 上野千鶴子『女たちのサバイバル作戦』（2013）文藝春秋 第9章
- (3) 中野円佳『「育休世代」のジレンマ』（2014）光文社新書 pp51-60
- (4) 女性のキャリアパスを阻む見えない障害の意味。1986年3月24日発刊のウォールストリートジャーナルにおいて、キャロル・ヘイモビッツとティモシー・シェルハードによって使用されたのが最初であるとされている。
- (5) 国税庁『平成26年 民間給与実態統計調査』（2014）によると、2014年度のサラリーマンの平均給与は415万円である。また、同調査「給与階級別給与所得者・構成比」によると、2014年度の女性給与所得者のうち、年収600万円を超えているものの割合は5.2%である。以上のことから年収600万円以上の女性は十分に〈高年収〉と定義できると考え、この層を対象とした。  
<https://www.nta.go.jp/kohyo/tokei/kokuzeicho/minkan2014/pdf/001.pdf> 2016.7.21 閲覧
- (6) 対象者を都市部の「キャリア女性」に限定するのは、下記の5点を仮説としたためである。
- ① 対象を都内在住者に絞った方が、より傾向が顕著にわかるのではないかと（都市部には一般企業が多く存在することから、キャリア継続女性の結婚・出産をめぐる問題が集中していると考えた。実際に、結婚や出産の傾向については都市部と地方との格差が開く中、正規社員として企業に就業する女性の多い東京都の女性の晩婚・少産傾向が最も高い）
  - ② 〈高年収高学歴〉であるがゆえに、就業の多忙さで未婚・晩婚傾向が強いのではないかと
  - ③ キャリア継続という点で、少子・未産の傾向が強いのではないかと
  - ④ キャリア継続への意欲、仕事への関心の高さが全国平均よりも高い人々ではないかと
  - ⑤ 結婚への希望や将来の出産への意欲が全国平均と異なるのではないかと
- (7) 厚生労働省『人口動態調査』（2014）上巻\_9-12\_都道府県別にみた年次別平均婚姻年齢（各届出年に結婚生活に入り届け出たもの）\_(2) 初婚の妻  
[http://www.data.go.jp/data/dataset/mhlw\\_20151130\\_0226/resource/c475a317-f982-47dd-8ce6-c4de86991cbc?inner\\_span=True](http://www.data.go.jp/data/dataset/mhlw_20151130_0226/resource/c475a317-f982-47dd-8ce6-c4de86991cbc?inner_span=True) 2016.1.21 閲覧
- (8) 厚生労働省大臣官房統計情報部『平成26年 我が国の人口動態（平成24年までの動向）』（2014）  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf> 2016.9.22 閲覧